

第2回 有永哲郎（大10）（2019.7.26）

～ 人生の選択 ～

1962年（昭和37年）に上野丘を巣立ってから、早くも57年が経過した。齢80歳を過ぎ、自分史の執筆を続けている昨今である。四極会事務局より、後輩への助言等の寄稿の要請を受けた。お役に立てるかどうかわからないが、私の決断の一端を述べてみます。



大学を卒業する時には、自分自身の人生の決断を迫られる。大学でのゼミが会計学だったこともあり、先生より銀行か商社への就職を強く勧められた。

私は安定した産業（企業）よりも、戦後復興を遂げつつあった日本にとって、これから必要な産業は何かと真剣に模索していた。当時、日本は外圧を受け、車の輸入自由化を迫られていた。当時の通産省は、自動車産業を守り、育成するため、二社程度に集約することを画策していた。私は、日本の経済的発展にとって、自動車産業は、最重要分野であると考えていた。日本の技術開発力、勤勉さを考えると、いずれ早い時期に世界一の自動車産業を確立できると確信していた。自動車業界に進むとゼロからのスタートのリスクがあるが、あえて、将来の夢に自分の人生を賭けることを決断した。

先生に伝えると、賛成できないので、推薦は出せないと言われた。それでも、自動車会社の面接を受け、入社した。

入社してみると毎日が多忙の極みで、いくら時間があっても足りない。それでも仕事の成果は目に見える。充実した毎日であった。20年が経過した1980年代の初期にはアメリカ、ヨーロッパを抜いて、技術、生産面において世界トップの地位を確立した。これ以降の20年間は、世界の自動車業界の要請を受け、指導や支援のため海外出張が多く多忙を極めた。それでも成果を見て、感謝されると喜びが沸いてくる。自分の選択は正しかった。